しょううつしあさがおばなし

生写朝顔話

〔解　説〕

天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ違いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔明石浦船別れの段　あらすじ〕

芸州岸戸家の家老の娘深雪は、京都の宇治川へ蛍狩りに行った際、周防から儒学修業に来ていた宮城阿曽次郎と出会い、互いに思いを寄せます。阿曽次郎は深雪の扇に「朝顔の歌」を書いて渡し、再会を約束して別れます。二人はそれぞれ国元へ帰ることとなり、その途中の明石の浦で風待ちをしていたところ、偶然再会します。阿曽次郎は深雪の恋心に打たれ、一緒に連れていくことを決意するのですが、急に風が出て船が出港することとなり、二人は再び離ればなれになります。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

明石浦船別れの段

わだづみの浪の面照る月影も、明石の浦の泊り船。風待つ種のつれづれを慰めかねて阿曽次郎、舳先に立ち出で月かげに、四方(よも)を見はらす気晴しの、煙草の煙り吹き靡く船路の旅ぞ物淋し。そばにかゝりし大船は、秋月弓之助が帰国の乗船、乗り手も水夫(かこ)も船草臥(ふなくたびれ)、前後も知らぬ高鼾。

娘深雪はたゞ一人、目さへも合はぬ恋人を、思ひ焦れてうつ〳〵と、恋に心をつくし琴、せめて慰むよすがもと、掻き鳴らしたる糸調べ。

〽露のひぬ間の朝顔に、照らす日かげのつれなきに

「テ合点の行かぬ。あの歌は過ぎつる宇治の蛍狩りに、秋月の娘深雪が扇に某(それがし)が、書いて与へし朝顔の唱歌。声さへ深雪に生写し。ハテいぶかしさよ」

と見上ぐれば、あなたも見下す月影に、顔はまさしく、

「深雪殿ではないか」

「ヤア阿曽次郎様。逢ひたかった」

とばかりにてわれを忘れて乗移るを、抱き取りて口に手を当て、

「ハテ声が高い深雪殿。思ひもよらぬ今の対面、なにゆゑにこの所に」

「さればいな。宇治でお別れ申してより、片時忘れず泣き暮らすうち、国元に騒動起り、父母ともにはかの旅立ち。所詮逢ふこと叶はぬかと、なんぼう悲しう思うたに、こゝで逢うたは尽きせぬ縁。どうぞこの身をいづくへも、連れて退いて給はれ」

と、思ひ詰めたる娘気の真実見えて可愛らし。

阿曽次郎も心を察し

「オヽ嬉しいそなたの志、忘れは置かぬ、さりながら、そなたを今連れ退(の)いては、某が武士道立たず。殊にこの度伯父の頼みにて、遁(のが)れぬ主用。なほもって女を同道しがたき入訳。ある縁ならば添ふ時節もあらう。ガかうしてゐては人の咎め。サアちゃっと元の船へ乗ってたも」

「エヽそりゃ聞えませぬ阿曽次郎様。添はれる時節もあらうとは、当座遁れの捨て詞。お気に入らずば打明けて、包まずそれというてたべ。添はれぬ時には渕川へ、たとへ身を投げ死するとも、ふたゝびほかの夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」

とばかり水底へ、既に飛ばんと立ち上がるを、あわて驚き抱き止め

「コレ待った。はやまるまい」

「イエ〳〵放して殺して下さんせ」

「アヽ是非もなし。それ程まで思ひ詰めた娘心、見殺しにどうせられう。不義いたずらと世の人口、謗(そし)らば謗れ連れて退く。これ尽未来(じんみらい)まで女房ぞや」

「エヽ嬉しうござんす忝い」

とひったり抱きつきの夜の、影も隔てぬ比翼鳥、離れがたなき風情なり。

阿曽次郎ふっと心つき、

「このまゝに連れて退かば親達の、もしや渕川へも身を投げたかと、お歎きあらんは定のもの。委(くわ)しい様子をつい一筆」

「オヽよういうて下さんした。私もさう思うてゐます。ガどうぞ料紙を貸して下さんせ」

「オヽ心得し」

と懐紙、腰をさぐって

「南無三宝。そなたを今抱き止むる拍子、海へなに

やら落とせし水音。旅矢立をはめてのけた。ア丶どうしたらよからうぞ」

「オ丶それなら待って下さんせ。二親はじめつきづきまで、旅草臥の寝入りばな。この間にそっと元船へいんで、一筆書置してきませう」

「ヲ丶それよからう。ガコレ必ず物音させて、親達の目が醒めぬやう」

「心得ました」

と立ち上がれば、阿曽次郎は肩車、あなたの船へ乗り移らす。

音に目覚ます船頭ども。

「ヲ丶地嵐が吹出したぞ。碇(いかり)を上げよ、帆を巻け」

と騒ぎ出せば、

『なう悲しや』とあせるうち、船は次第に遠ざかる。

『コハなんとせん、かとせん』とあせるはずみに阿曽次郎が、船へ投げ込む扇の別れ、後しら浪を隔ての船、つながぬ縁ぞ　（是非もなき。）

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。